

発行：株式会社リンク・インタラクティブ
担当：事業統括ユニット プロダクト開発グループ
住所：東京都中央区銀座四丁目12番15号
TEL：03-6853-8265 FAX：03-6859-9070 E-mail：info@interac.co.jp



日本の英語教育・子どもたちのために実現したいこと

(株)リンク・インタラクティブ エグゼクティブ・コンサルタント
(元 関西外国語大学 教授) 中嶋 洋一

自治体向けALT配置事業を全国展開するリンク・インタラクティブでは、ALT活用に関する様々な研修やセミナーを第一線で活躍する研究者の先生方と共に展開してまいりました。そのうちのお一人、元関西外国語大学教授の中嶋洋一先生を2023年4月より弊社エグゼクティブ・コンサルタントに迎え、さらなる支援をいただくことになりました。公立学校の教員、行政や研究所、大学と様々なフィールドでの経験を活かし、これからの英語教育のより一層の充実をめざして、リンク・インタラクティブとともに取り組んでいきたいこと、実現したいことについて、中嶋先生にご寄稿いただきました。

1. リンク・インタラクティブとともに

私は、今まで、リンク・インタラクティブの依頼で「学校教育国際化セミナー」で横浜、大阪、広島、福岡などを訪れ、チームティーチング(以下TT)の具体例をご紹介してきました。また、一昨年、リンク・インタラクティブから「中学校英語検定6教科書対応 Team Teaching 活動案集」を出しました。執筆者は、いずれも検定教科書の編集著者の方々です。活動案集では、新しい学習指導要領の「3観点」に基づいた授業デザイン、いつ、どこで、どんな活動を用意すれば有効なTTになるかというアイデア等を紹介させていただきました。

ただ、残念ながら、現場ではまだまだ自然なインタラクティブのあるTT授業が見られていません。コロナ禍で、マスク生活を余儀なくされていることもあったかもしれませんが、授業が迷走していること(教え込む授業の復活、タブレット端末使用が目標の授業など)が大きいように思います。

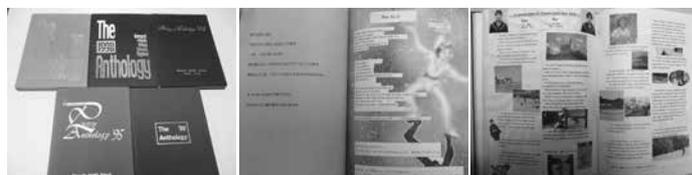


中嶋洋一 先生
(株)リンク・インタラクティブ エグゼクティブ・コンサルタント
(元 関西外国語大学 教授)

2. 目先の授業ではなく、 コミュニケーション能力育成のために

TTで目指すことは何でしょうか。それは、個々の生徒のコミュニケーション能力の育成です。私は、現場(中学校)で、

12名のALTとTTをしてきました。彼らから学んだことは無形の知的財産となり、以後の授業づくりに活かされていきました。たとえば、ハードカバーの卒業文集づくり、松本 茂氏(現 東京国際大学 教授)を招いて行ったクラス対抗ディベート、Focus on Formの授業(ネパールってどんな国、割り箸とカナダの新聞を取り上げた環境問題、比較級で考える性差別など)、プレゼンテーション大会などが、ALTと取り組んだことでした。



10年間続いたALTとのコラボ「ハードカバー英語卒業文集」

ALTの経験や背景にある文化を活かした授業は、生徒たちが前のめりになって聞こうとしました。伝えたいことがあるのに伝えられないというもどかしさ、英語を学ぶ必然性を感じた生徒たちが、再度「入力」(復習)に戻るといこともしばしば起こりました。生徒たちは、意図的に作られたギャップに驚き、教科書の内容を発展させたダイナミックな授業に夢中になりました。やがて、生徒たちは物おじせずに、堂々と自分の考えを言えるようになっていきました。それは、「学ぶ楽しさ」を知ったからに他なりません。

今回の学習指導要領の中に「主体的、対話的で深い学び」という記述があります。それを目的として、授業を行うということです。そして、その手段(視座)となるのが「アクティブ・ラーニング」です。

英語学習では、特に「対話的」の部分が重要です。ペアやグループになって話をするという意味ではなく、次のような要素が必要になります。つまり、どの活動もインタラクティブ(相互に作用・影響し合う、双方向の)であること、話題が「自分ごと」で捉えられる内容であること、「理解度」を確認するために質疑応答の場面を作ること、理解を深めるために情報を可視化すること、「振り返り」を位置付け、当初の目的と目標を確認

した上で「言語化」(自由記述)することです。

Interact(in・ter・act)は「交流する、互いに影響し合う」という意味です。日本人教師(以下JTE)もALTも、学習者にとってはインタラクティブな存在です。ですから、TTの授業で、お互いの役割がそうになっているかどうかを検証する視座を持つことが大事です。

言葉は、覚えるから使うものではなく、使いながら身につけていくものです。赤ちゃんの言語習得がそのモデルです。英語力の向上に必要なのは「度胸」です。「量質転化の法則」の通り、何よりも「言語を使用する量」を増やすことが大事です。

しかし、間違えていることをそのままにしまうと、生徒は間違えたまま覚えてしまいます。そうならないために必要なのが、教師と生徒とのインタラクションです。やり取りをしながら、生徒が「そうか!そう使うのか」とハッと気づけるようにするのです。

導入であっても、教科書の内容理解であっても、文法定着の活動であっても、生徒とコミュニケーションをとりながら指導をするということです。

コミュニケーションはQ & Aではありません。突然 Repeat after me. が入ったり、Do you understand? (正しくはMake sense?)といった言葉が入ったりすると、それまでの授業の流れ、学習者の意識がプツンと切れてしまいます。

インタラクティブな授業をしている教師は、Am I right? Yes or No? / So what about you? What do you think? / Tell me more about it. / That's all. Do you agree with me or not? Why? のように、生徒と対話をするように問いかけ、自分の考えが持てるようにしています。生徒が夢中になる授業では、教師の質問に対する答えの正しさではなく、生徒自身の「伝えたい内容」を引き出すことが鍵になります。

それを支えるのが、教師の確かな英語力(専門性の高さ)、授業マネジメント力、学級統率力(生徒理解、生徒指導など)です。どれが欠けても、目指すゴールにはたどり着けません。教師は、日々、その研鑽を積んでいかなければなりません。そうでないと、指導がワンパターンになり、どんどん英語教師としての資質が劣化していきます。

3. TTを「共同」(分担)から「協働」(互惠)の関係に

これまで、行政(指導主事)、または個人で招請されて授業を拝見する機会が450回ほどありました。そこで痛感したことは、教え方にしか関心がない(自分目線の)教師と生徒の変容に関心がある(相手目線の)教師では、方向性がまるで違うということです。JTEが中心になって考えられたTT授業(●)とALTと一緒にデザインされたTT授業(○)とを比較してみます。その差は歴然です。

●ALT: What country do you want to go to?

生徒: I want to go to the U.S.A. (その後、JTEが文法を説明)

○ALT: (次のように板書をして何が入るかを生徒に尋ねます)

_____ , so I want to go to the U.S.A.
_____ , but I want to go to the U.S.A.
_____ because I want to go to the U.S.A.

生徒: I want to see the Statue of Liberty, / I like MLB,
so I want to go to the U.S.A.
I can't speak English well, / I don't like English,
but I want to go to the U.S.A.
I am doing a part-time job / I am learning English now
because I want to go to the U.S.A.

●代表の生徒(S)が前に出て、Who am I? と全員に尋ねます。

S: Hint one, I'm a robot. Hint two, my body color is blue. Hint three, I love Dorayaki. Who am I? (全員「ドラえもん!」)

JTE: OK. Good. Who's next?

○ALTとJTEが、生徒一人ひとりの背中に、有名人の名前が書かれたシールを貼ります。最初の3分間は Yes-Noの質問(一人に1つ)をして「自分が誰か」を考えます。次の3分は5W1Hの質問をします。答えがわかったら、そこから「関連する質問」に切り替えます。時間が来たら4人グループになって自分が誰かを当てます。違っていたら、残りの3人が30秒間英語で「ヒント」を与えます。こうすると、誰もが「自分ごとの学習」となるので、クラスが騒然となります。ALTが最後にコメントを言います。

共同(分担制)のTTでは、ねらいが文法定着になっており、学習のプロセスもワン・ウェイが多いようです。一方、ALTと協働作業で考えられた授業では、文脈が大事にされ、インタラクティブな活動になっています。

英英辞典(COBUILD)では、teachを次のように説明しています。To teach someone something means to make them think, feel, or act in a new or different way. つまり、“teach”によって学習者が変容するということです。それを最後まで責任を持って見届けるのがteacherの仕事であり、チームティーチングはそれを相互作用させるということです。

4. 今後、実現したいこと

小学校では令和2年に、中学校では令和3年に新しい学習指導要領がスタートしました。AI(人工知能)、VUCA(予測不能)の時代に生きる子どもたちにとって、自分が得た知識を「活用」できること、問題発見・解決する能力を身につけることが喫緊の課題です。しかし、「教師ファースト」の授業がなかなか無くならないのは何故でしょうか。私が会おうALTは、どの方も「自分は、もっとクリエイティブで、役に立つ授業がしたい」と願っています。「時間が無い」からと付け焼き刃で目先の授業の準備をするのではなく、明確なゴール(最後に育てたい生徒像)を設定し、そのために何ができるかを話し合うことが肝要です。

私は、ALTとのTTで授業が大きく変わりました。大学を退官した今、少しでもその恩返しができるかと考えています。それはTTを活性化させるコツを少しでも多くの方に知っていただくことです。

たとえば、好評の「中学校英語検定6教科書対応 Team Teaching 活動案集」を活用した実際の授業を弊社のクラウドサービス「Teachers Cloud」から提供する、セミナーなどで生徒が夢中になる授業デザインの仕方を伝える、現場に足を運び、実際に授業を拝見して具体的に授業のアドバイスをするといったことです。

ですから、どんな小さなことでも、遠慮なく筆者、または弊社までご相談いただけたらと思います。

お問い合わせ

- なかよう備忘録
ホームページ: <https://nakayoh.jp/>
- リンク・インタラック
ホームページ: <https://www.interac.co.jp/>